書評・紹介

大淵　寛・森岡　仁,『経済人口学』

新評論, 1981

人口学は学際的な学問だと言われている．しかし，わが国では，いまのところ人口学が学際的な学問として成立しているわけではなく，それぞれの研究者が自分の学んだ既成の学問分野にしっかりと足場を確保しながら，その姿勢で人口を研究しているというのが本当である．実際，いまのところ，いたずらに学際的という表現にとらわれて自由勝手に人口の研究らしいことをやるよりは，既成の学問体系をバックにして人口の研究を積み重ねていく方が安全かつ効率的であるように思われる．人口学が学際的な学問として完成するのは，まだもっと先のことだと考えるべきである．

経済人口学（economic demography）は経済学の見方からする人口の研究を本務とするものであるが，昔からの人口と経済のかかわり合い，また経済学における人口要因の取り扱いからみて，比較的完成への目途をつけ易い分野である．その意味で，私達のように経済学から人口研究の途に入った者にとって，経済人口学の完成に貢献することは，登山家達が前人未踏の名峰を目ざすようにきわめて魅力ある目標でもある．

大淵寛・森岡仁氏の近著は，こうした努力の貴重な成果である．大淵氏はすでに『人口過程の経済分析』を公にされたし，森岡氏は『人口経済論』において大淵氏と共著され，両氏ともその他多くの業績をこの分野であげておられるが，この度の新著はこれらの業績を改めて体系化されたものとして評価される．とくに，新著では歴史・理論・政策の３部門にわたり，経済人口学の体系を具体的な形で示すことが目標にされており，その意味で経済人口学の出発点となるべき業績を世に問われたものである．

本書の構成は，第１章人口と経済の発展過程，第２章経済人口学への歩み，第３章経済人口学の現状，第４章日本の人口と経済発展，第５章現代世界の人口問題と人口政策となっている．いわば，第１章は人口経済史であり，人類発生以来現代にいたる超長期の人口と経済のからみ合いが叙述されている．第２章は経済人口学説史であり，マルサスの先駆者から最近の学説までを跡づけている．第３章は経済人口学の理論であり，出生力の経済学，人口と経済成長の理論，および適度人口理論が論じられている．第４章は歴史，理論，政策の各方面から日本の人口と経済発展を述べた一つの独立の業績である．そして第５章で現代世界が当面している人口問題と人口政策を先進工業国，社会主義国，低開発国別に，また人口，資源，環境といった問題別に論じている．

以上の簡単な紹介からも推察されるように，本書が経済人口学の基本的文献として専門家の間で長い寿命を保つであろうことは疑う余地がない．またひろく人口学に関心を抱くあらゆる研究者にとって必読の重要な書物となることも言うまでもない．

ただしこの機会に，経済人口学の今後の発展方向について，私が日頃考えていることを披露して著書の御批判と御教示をたまわりたいと思う．

それは，経済人口学のバックボーンとして設定されるべき基本概念は何かという問題である．周知のとおり，経済人口学の本家にあたる経済学では，ケネーの「経済表」に由来する経済循環論が常に背骨として意識されており，アダム・スミス，マルクス，マルサス，ケインズなどの経済学をそれぞれ一つの体系としてまとめ上げる役割を果している．経済人口学において経済循環論のような役割を演じる基本概念は何でなければならないのだろうか．この問題は近頃，私の念頭を離れない課題であるが，徐々に人口再生産論がそれではないか，そして経済循環と人口再生産との相互関係の分析が経済人口学の基本課題でなければならないという思いが強まりつつある．この点，大淵・森岡両氏はどのようにお考えであろうか．御教示を得る機会があれば幸いである．

（岡崎　陽一）